

新聞を教科等の学習を深めていくための資料としてどう活用していくか

平成21年度NIE全国大会長野大会公開授業を振り返って

実践校2年次 長野市立吉田小学校 豊田義幸

・本校のNIEの現状

本校は全校児童806名、各学年4クラスから5クラスの大規模校である。指定を受けた平成20年度よりNIEの実践を始め、2年目の今年、NIE全国大会長野大会の発表校として、公開授業を行った。30度を超える暑さと400名近い県内外の先生方や新聞社の方々の熱気の中、充実した授業研究会を行うことができた。



本校では、この指定を受けるまでは、特に「NIE」を意識しての活動は行って

こなかったため、昨年度より、とにかく実践を積み上げ、検証してみることから始まった。その中で大事にしてきたことは、「まず新聞ありき」ではなく、新聞を教科の学習を深めるための資料として活用してきたという点である。単に新聞を扱えばよいというのではなく、なぜ、あえて新聞を使うのか、新聞の良さとは何か、について研究グループで検討してきた。その成果を実践授業を通して、全国の先生方、新聞社の方々に見て頂いたことは大きな意義があったと考えている。

・NIEで高めたい力

本校の全校研究テーマである「課題を持ち、ひびきあい、追究していく子ども」をもとに研究を深めてきた。この研究の立場に立ち、NIE活動を通して高めたい力は、主に以下の点である。

1. 広い視野に立って考える力

記事について自分の思いや考えを伝え合い深め合う中で、コミュニケーション能力を高める。そして、より広い視野に立って考える力を身につける。

2. 自分の思いや考えをすすんで表現する力

記事から読み取ったことを発表したり、話し合ったりすること。新聞を作って発信すること等を通して、文章力・表現力・読解力を身につける。

・研究の概要

1. 実践教科

本校では、上記の立場から昨年度より「国語科」「社会科」において研究グループを作り、教科のねらいを大事にしながら新聞活用のあり方について研究を深めてきた。本年度は以下

の研究テーマを設定し、各教科で取り組んできた。

国語科「言葉を豊かに味わう子ども」～新聞作りを通じた伝え合い学習の中で～

社会科「子ども一人ひとりが課題を持ち、主体的に追究する中で社会事象に対する認識を深めていく社会科学習はどうあったらよいか」

～社会科授業における効果的な新聞活用（NIE教育）の構想・実践を通して～

2. 新聞の提供状況

新聞については、4月～7月までの4カ月間、信濃毎日新聞、信州日報、毎日小学生新聞、朝日小学生新聞、産経新聞、読売新聞、日本経済新聞の7紙を配達して頂いた。本年度は、難解な文章の抵抗感をできるだけ取り除くために、毎日新聞を毎日小学生新聞に、朝日新聞を朝日小学生新聞に変更をお願いした。特に全国大会公開発表学級で利用した。

・新聞を取り入れた実践をする上で特に工夫したこと

昨年度の実践から、特に以下の点を重点として新聞を活用した授業の実践を行うこととした。

(1) 各教科の「ねらい」を明確にする。

(2) 学習のねらいに迫る単元構想を持つ。

(3) 上記の点をしっかり見据え、以下の視点を持ち新聞の教材化を考える。

子どもの実態に合わせ、単元構想のどの学習場面に新聞が教材として使えるのか。

あえて新聞を使う理由は何か。新聞の利点を生かしたい。

～最新の情報・信頼性、地域性の高さ・幅の広さ・発信力～

新聞の困難点は何か。どうクリアしていくのか。

膨大な情報量。小学生には難しい文章。

・NIE国語科全国大会全国大会公開授業から

(公開学級 5年3組 指導者 長崎至弘教諭)

1 本時案

(1) 単元名「たくさんの人たちに知ってもらうために作る、よしだアートプロジェクト新聞」

* よしだアートプロジェクト

小学校児童がキッズ学芸員となり、美術作家にアドバイスをいただいたり、共同して制作した作品などを校内に展示、解説する企画。小学校を美術館に変身させ、児童や地域の方々に美術作品制作の楽しさや鑑賞の楽しさを感じてもらうことをねらいとしている。本校も開催校の一つとなり、今年も多くの方々が集まりにぎわった。

(2) 単元の目標

自分たちのよしだアートプロジェクトの準備の様子からニュースを探して伝えることに興味をもち、伝え方や内容を工夫しようとしたり、友達の感想や意見を積極的に採り入れたりしようとする。(関心・意欲・態度)

読み手の状況を考えながら、自分たちの考えが伝わりやすい新聞にするための編集・発行計画を話し合う。(話すこと・聞くこと)

見出しや文章構成に着目して、事実と感想、意見とを区別しながら整理し、効果的に配列して新聞記事を読んだり書いたりする。(書くこと)

自分たちの考えを明確に表現するための文章構成を理解活用する。(言葉のきまり)

(3) 単元展開の概要 ()は総合的な学習の時間数

子どもの意識の深まり	学 習 内 容	時間
<p>o私たちのよしだアートプロジェクトにたくさんの人に来てほしい。新聞のようなチラシを配れようかな。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・よしだアートプロジェクト2009にたくさんのお客さんに来てほしいと願って考える, 宣伝の方法。 ・日時や場所だけでなく, 自分たちのそれぞれのプロジェクトの様子も伝えたいと考え目を向ける。よしだアートプロジェクト新聞作り。 	(1)
<p>単元の学習課題 どのようにしたら, 読む人に私たちの活動が伝わる新聞になるだろうか。</p>		
<p>oやっぱり新聞はたくさんの人たちが見ているんだ。どんなことを書いたらいいのかわかりながら, 伝えたいことを書いてみよう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・新聞記者の方の記事作りについての話を聞く中で気づく, 新聞はテレビやネットのニュースや雑誌と違って, 世代や性別など不特定多数の人たちが目にする機会の多い優れた情報媒体である事実。 ・他のクラスの進行状況を取材して共有する, プロジェクトを成功させたいという思い。多くの人に読んでもらえる事を考えて書く, 自分のプロジェクトの記事。 	(1) 1 3
<p>o他のクラスのみみんなもがんばっているな。一緒に記事にしてみよう。でも, 本当に来てほしい子どもたちには伝わるようになっているのかな。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・知らせたい事柄, 内容からレイアウトを決めだし, 絵や写真を入れて完成させるよしだアートプロジェクト新聞 第1号。 ・できあがった新聞を, 吉田小児童に配布し, 感想をもらう中で気づき, 実際の紙面で調べる「より読みやすく分かりやすい」文章表現や見出しと, 紙面のデザインのあり方。 ・作った新聞記事を, 新聞記者の方や広告会社の方に見てもらい, 教えていただく, 見出しの書き方と紙面レイアウトの工夫。 ・相手に, よりダイレクトに情報を伝えるために決め出す, よしだアートプロジェクト新聞第2号の制作。 	(2) 2 (1)
<p>o私たちの手で, 直接学校に届けられるように, よしだアートプロジェクト新聞をつくろう。相手が小学生なら, 低学年の人にも読めるように, 漢字は少なくしてみよう。写真を多くすると, 情報が伝わりやすいよ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・吉田小児童や近隣の小学生など 読み手である相手の状況を考えながら, 自分たちの考えが伝わりやすい新聞にするために, 見出しや文章構成に着目して, 事実と感想・意見とを区別しながら校正していく。 ・実際の新聞記事の内容とその紙面レイアウトからその効果を考え, 参考にして表現する, 「より読みやすく分かりやすい」紙面構成。 ・自分の考えや意図を明確に持ち, 自分たちの伝えたい内容を分かりやすく伝えることや, 全体の紙面構成を考えて行う, 話し合い。 ・実際の新聞に掲載されている写真をもとに考える, 写真から読み取ることができる情報量の多さと画像資料のよさ。 ・新聞を清書し, 他の学校に届けたり, 配付したり, 掲示板に掲示したりする中で感じとる, 読み手の反応。 	(2) 1 本時 3 (2)

(4) 本時の学習計画

本時のねらい

読み手の状況をふまえ, 書いた記事や写真を紙面の中に構成してきた子どもたちが, 実際の新聞紙面の写真と, その写真説明文を見ることを通して, 写真だけでは何を表しているのか, 何をしている場面なのかのかわかりにくい, 写真の説明文を読むことでどんな場面の写真なのかのかわかり, 写真と写真説明文だけを見ても, 記事の内容がほぼつかめることに気づき, 読み手にとって「読みやすく分かりやすい新聞」にするために, 写真だけではわかりにくい事柄を補うことや, 自分たちの伝えたい内容を分かりやすく伝えることを考えて, グループで話し合い, 写真の説明を書くことができる。

本時の位置

18時間(総合的な学習の時間10時間を含む)中の第15時

(5) 展開

過程	学 習 活 動	予想される子どもの動き	時間	指 導 と 評 価
課題への見通し	学習課題 読む人にとって「読みやすく分かりやすい新聞」にするためには、 写真の説明文をどのように書いたらよいだろうか。			
	1 低学年にも「読みやすく分かりやすい新聞」にするために、どんな工夫を考えてきたのか、前時までの活動を振り返り、自分の考えを発表し合う。	○記事は一番伝えたい事を大切にしてい、それ以外のことは削ったり少なくして、見出しと写真で伝わるようにしてきたんだ。 ・内容がわかりやすいように見出しを大きくしてインパクトがあるようにした。 ・わかりにくい言葉は簡単な言葉になおしたり、漢字にふりがなを振ったりした。 ・文章は一番伝えたいことだけにしてい、長くするより短くしてきた。 ・アートプロジェクトは「楽しいんだ」というのが伝わればいいと思って、写真を大きくした。明るく元気な、笑顔の写真を選んだよ。	5	○今までの学習の中でつかんできた、「より読みやすく分かりやすい」新聞のための工夫を出し合いながら、写真の説明文について、考えていくようにする。 ・説明が曖昧なときは、具体例をあげて説明していかれるようにする。 ・同じ考えの友だちと自然に互いのかかり合いや語り合いが行われるような雰囲気をつくっていく。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px; text-align: center;"> 評 価 写真の説明文を考えていく見通しと意欲がもてたか、発言やつぶやき、表情からとらえ、教師も共に考えていく。 </div>
追究	2 読み手が小学生低学年の場合を考えながら、写真の説明文を考え合う。	○写真だけではわかりにくいところを説明するように書けばいいんだな。 ・説明文には、物の様子を詳しく表しているものと、状況を表しているものがあるよ。 ・写真だけでは何を表しているのか、何をしている場面なのかかわかりにくいけれど、写真の説明文を読むことでどんな場面の写真なのかよくわかるね。 ・ぼくたちが選んだ写真は、人物の笑顔が目を引きけれど、何を見て笑っているのかかわかりにくいから、それを説明すればいいんだな。 ・記事を読まなくても、だいたいのがわかるくらいの説明文になればいいね。 ・写真説明文が入り、とうとう「アートプロジェクト新聞第2号」完成だ。	5	○実際の新聞紙面の写真と、その写真説明文を提示して、感じたことを話し合う場面を設ける。 ・常に読み手の立場に立って説明文を考えていくようにする。 ・他のグループの写真説明文を読み、気づいたことや、変えていった方がよいことをアドバイスする場を設ける。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px; text-align: center;"> 評 価 自分の考えをまとめたり、友の考えを聞いたりする中で、読み手に自分たちの思いが伝わりやすい新聞にするためにどう紙面構成し、見出しをつけたらよいか考えて、話し合おうとしているか、発言やつぶやき、記事への記述からとらえ、その気づきのよさを学級全体に伝えていく。 </div>
	3 活動を振り返り、次時への課題を持つ。	・写真説明文が入り、とうとう「アートプロジェクト新聞第2号」完成だ。 ○読む人のことを考えて、紙面全体のレイアウトを考えてきたから、いままでもずっと読みやすく分かりやすいアートプロジェクト新聞になって、たくさんお客さんが来てくれるんじゃないかな。 ・近くの学校に届けに行き、読んでくれているところを見たいな。 ・たくさんの人たちが私たちのアートプロジェクトに来てくれるといいね。		○完成した新聞の紙面を見合い、第1号の新聞より具体的にどう変わって、どうわかりやすくなったのか、感じ合う場を設ける。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px; text-align: center;"> 評 価 本時の活動から次の活動への願いが持てたか、発言やつぶやき、学習カードの記述などからとらえて次時の課題を設定していく。 </div>
次の課題へ				

2 授業の実際

授業の導入場面で、教師は信濃毎日新聞の実際の新聞紙面の写真を提示し、その写真の説明文を予想させた。その中で、子どもたちは、写真だけでは何を表しているのか、何をしている場面なのかわかりにくい、写真の説明文を読むことでどんな場面なのかがわかり、写真と写真説明だけ見ても、記事の内容がほぼつかめることに気づいた。そして、それぞれのグループに分かれて自分たちのプロジェクトの記事の写真に、どんな説明をつけたらよいか、考えていくことができた。

3 成果と反省

授業の中で教師が提示した記事と写真は、新聞の本質にふれていく本時最大の支援であったが、子どもたちのそれまでの熱心な活動を考えると、別の支援もあったかもしれない。

あるグループは、短い文章の文末の表現について考えていた。「羽を取り付けている」にしようか、「羽を取り付けているところ」にするか考えていた。また、説明文の語順を変えてみようということも考えていた。K児は「この写真の時って、作品もう全部できあがっていたっけ？」という発言をしていた。子どもたちが、記事を書き、たくさんの写真の中から新聞に載せる1枚を選んだ時点で、もうすでに伝えたいことがあるということだ。そこに立ち返ることで、この記事で一番伝えたいこと、そのときの気持ちを整理させていくことができたかもしれない。

国語科として、言語活動を通してどんな力をつけていくか。子どもたちが、一つの言葉の意味や受ける感じ、文末表現にも注目して、グループ全員で吟味をおこない決めだしたことに、本時の学びのすべてが表れていると考える。

わたしたちは、言葉を氷山の一角と考えると、子どもたちは、海面に出ている言葉と深く関わり、友と伝え合う中で、言葉そのものもつ意味だけでなく、海の中に当たる部分である背後に広がる言葉の状況や人ものことの関係や意図など、様々な要素を見つめ、言葉の持つ多様な意味に迫りながら、言葉を豊かに味わっていくものと考えた。

そうした子どもたちの、必要感のある学びをささえるためには、わたしたち教師自身が、言葉を見つめ、その言葉のもつ意味の奥行きに細心の注意を重ねていくことの大切さを改めて感じる。

わたしたちはこれからも子どもたちの健やかな学びをささえていくことができるよう、子どもたちと共に、言葉を豊かに味わうことができる教師でありたいと考える。

.NIE社会科全国大会全国大会公開授業から

(公開学級 6年3組 指導者 竹内 隆司教諭)

1 本時案

(1) 単元名

「わたしたちの生活と政治・裁判所のはたらき ~新しい裁判の仕組み?【裁判員制度】」

(2) 単元の目標

・現在の我が国の民主政治は日本国憲法の基本的な考え方にに基づき、国民主権と関わって国民生活の安定と向上を図るために政治が行われていることを、調査したり資料を活用したりして調べる中で理解を深めていくことができる。

- ・「国会と内閣と裁判所の三権相互の関連」の概要と共に、「司法権を持つ裁判所」が法律に基づいて裁判を行っていることを理解することができる。
- ・「国民の司法参加」については、国民が裁判に参加する裁判員制度を取り上げ、法律に基づいて行われる裁判と国民とのかかわりについて関心を深めることができる。

(3) 評価計画 (授業中の子どもの姿や、学習ノートの見取りから評価していく。)

社会的事象への 関心・意欲・態度	社会的な思考・判断	観察・資料活用の 技能・表現	社会的事象についての知 識・理解
・裁判も、国民生活の安定と向上のために大切な働きをしていることに関心を持ち、意欲的に調べ、考えながら追究している。	・裁判員制度を通して、「国民の司法参加」という、法律に基づいて行われる裁判と国民とのかかわりを考え、判断している。	・裁判員制度について、見学・新聞や資料の活用、インタビューを通して具体的に調べ、わかりやすくまとめたりするなど表現している。	・裁判も、国民生活の安定と向上のために大切な働きをしていることがわかってる。

(4) 単元計画

<p>日本国憲法の3つの柱を中心に、民主政治が憲法と深く関わっていることを学ぶ。 「わが国の三権の仕組みと分立についてを学ぶ。 国会（立法）・内閣（行政）・裁判所（司法）の概要を学習する。 * 裁判の仕組みを夏休み前に、国会・内閣は、東京社会見学に向けて夏休み明けに詳しく学習</p>
<p>資料集の裁判員制度を入口に、新聞を使った、裁判員制度についての追究過程を仕組む。 * 東京社会見学に向けての学習時間 (国会・内閣の学習時間)を圧縮し、時数を確保する。</p>



単元の段階	単元序盤 ・ 4 時間	単元中盤 ・ 4 時間	単元終盤 ・ 4 時間
社会科の学習過程	社会的事象の見出し	社会的事象の吟味 (社会認識が構成される)	社会認識を深める (社会的な判断力をつける)
新聞活用の可能性	記事から、社会的な出来事や事実を知る。 「どのような事か？」という追究資料として	「なぜ～なんだろう？」を調べる資料として →	「どうしたら、いいか」という、判断の根拠を示す資料として。
* (6)教材研究参照 採用する記事の型	事実型 記事を中心に	背景型 記事を中心に	意見型 記事を中心に
裁判員制度についての追究過程	裁判員制度における概要と課題をつかむ。	裁判員制度の概要と課題における疑問点を調べる。	裁判員制度の是非について自分なりの考えを持つ
学習を補完する手だて	裁判所の方や新聞記者さんのお話・パンフレット・裁判所見学 (模擬裁判)		

(5) 本 時

本時のねらい

新聞記事や資料・新聞記者や裁判所の方のお話・裁判所見学から、浮き彫りになった裁判員制度の理念と課題を軸に、どのように裁判員制度に関わっていったら良いか、これまでの追究から得た根拠をもとに自分の考えを发表或し、友だちの考えを聞いたりすることを通して、法律に基づいて行われる裁判と自分たちが暮らす社会との関わりや、裁判員制度と自分との関わりについて、考えを深め関心を広げることができる。

<p>* 本時で扱った資料</p> <p>藍木陽一さんの話（長野家庭裁判所・総務課長）</p> <p>信濃毎日新聞「裁判員制度 識者の視点より」</p> <p>・玄侑宗久さん記事「日本の国には合わない」(H21.6.11)・但木敬一さん記事「死刑判断全員一致で」(6.19)・森達也さん記事「司法は既に民意迎合」(6.18)</p> <p>朝日小学生新聞 「裁判員制度」小林・金尾さんの作文記事(H21.5.25)</p>

展開

	学習活動	予想される児童の姿	指導・助言	評価	時	教具
導入	1, 裁判員制度についての既習内容のふりかえり	学習経験から、裁判員制度の概要や裁判の国民参加の理念や課題等が確認されるだろう。	既習内容を子どもたちに聞き、補足説明を加えながら確認する。		5分	教室掲示
展開	<p>2, 前時に考えた裁判員制度への関わり方について、同じような考えの友達と組んだグループで、「なぜそのように考えたか」という根拠を持って発表する。</p> <p>どのように裁判員制度と関わっていったら良いか？</p> <p><参加したい> 【提示】但木敬一さん記事・I N・S・N等</p> <p>参加したい!</p> <p>関わりたくない!</p> <p><関わりたくない> 【提示】玄侑宗久さん記事・Y T・A M等</p> <p>わからない!</p> <p>もっと知りたい!</p> <p><今は、わからない> 【提示】森達也さん 玄侑宗久さん記事・K S・T A等</p> <p>上手に関わりたい!</p> <p>上手に関わりたい!</p> <p><上手に関わりたい> 【提示】金尾さん作文 藍木さん写真・M Y・A Y等</p> <p>子ども発表において、説明不足等の点がある場合は、教師から補足説明を加える根拠を持って、自分の考えを発表できたか。</p> <p>自覚を持って!</p> <p><自覚を持って参加> 【提示】森達也さん記事 金尾さん作文</p> <p>責任を持って!</p> <p><積極的に参加する> 【提示】藍木さん写真・K M・S H等</p> <p>人生を左右したくない!</p> <p><人生を左右したくない> 【提示】小林さん作文・H N・K T等</p> <p>それぞれの立場から!</p> <p>それぞれの立場から! 【提示】田中さん・藍木さん写真 小林さん作文・H T・T H等</p> <p>これから...</p> <p><もっと勉強したい> 【提示】小林さん作文・M N・T M等</p>	<p>学習経験から、裁判員制度の概要や裁判の国民参加の理念や課題等が確認されるだろう。</p>	<p>既習内容を子どもたちに聞き、補足説明を加えながら確認する。</p>		35分	実物 投影機 モニター 記事 作文 顔写真
まとめ	<p>4 本時の感想を書く。</p> <p>5 感想を発表し合う。</p>	<p>友達の考えを聞き、なるほどなと思った。これからも、もっと考えていきたい。自分の考えが少し変わったような気がする。自分も社会の一員としてがんばりたい。</p>	<p>感想を書いたり、発表し合ったりした内容が、本時の学習における、自分の考えの広がりであることをおさえてから、まとめとしていきたい。</p>		5分	学習カード

2. 授業の実際

自分の考えを持つ根拠として新聞記事を利用し、意見を発表する活動は、友だちの意見を聞こうとする意欲が大きくなり、自分との相違点をしっかり聞き取ることができるようになる。「なるほど」と思えたことが、これから考えを広めたり深めたりすることにつながると考えられる。また、単に賛成・反対だけでなく、そう思うようになった根拠をあげながら自分の意見として、いろいろな立場から意見を出すことができている、考え方が一方的にならず良かった。一人ひとりがきちんと根拠を持って考える発表ができていた。しかし、単に意見を発表するだけの活動になってしまうと、お互いの考えが深まらず、考えがどう変化したのか追うことも難しくなるため、ディベート形式の授業形態を取るとか、グループの考えを板書して整理することも考えていく必要があるということが示唆された。

3. 研究の成果と課題

(1) 成果

全国大会長野大会の時の、6年3組の「裁判員制度」における実践に見られるように、教科書・資料集等に比べ最新性及び詳報性の高い内容に関わっては新聞活用の学習効果の高まりが見られた。このことに関わっては、大会終了後、さらに積み重ねてきた事例からも同様の効果が報告されている。

また、「裁判員制度」という小学生にとって難しい題材を、社会事象としてとらえ、社会的な認識を育む上で、検討を加えた上で単元化を図ったが、新聞記事からは、それに応える十分な情報が得られたのも事実である。また、一つの社会事象を多面的に、多角的に捉えるための資料を、新聞記事から収集することができることも実証されている。

また、新聞記事を定期的に収集する「新聞に親しむ活動」では、学習中に「それ、新聞に書いてあった」というつぶやきが増えたり、学習に関係した記事を持ってきたりする姿が多く見られるようになった。その意味で、子どもたちが新聞に触れていくことは、少しずつ社会に目を向けていく効果を持つと思われる。

(2) 課題

昨年度の研究でも課題とされた、(一般的な新聞は)「大人のための情報なので難しい」とと、(特別な手段を講じない限り)「情報検索の利便性が低い」ということである。

「難しい」という点では、相応の教材化が求められるし、易しさで言えば、子ども向けの本、教科書・資料集には、どうしても一歩遅れをとる。今年度は、事前に記事の要約文を教師が用意したが、それで十分かという疑問が残る。また、小学生新聞はそのまもの物を授業に導入しても概ね摘要されると思われるが、実践を積み重ねる中でその効果を確かめていきたい。

「情報検索の利便性」について、新聞は過去に遡るといった時間軸に弱いと思われる。「日常的な記事収集」や「図書館等での閲覧」等で時間軸に対応することも可能だが、やはり利便性に欠けると言わざるをえない。今回、全国大会長野大会に向けて事前3カ月間の記事収集を行う準備期間があったため、単元を通して有効に新聞を活用することができた。しかし、多忙を極める教育現場において何ヵ月も先の学習を、日常的に構想・準備していくというのは、やはり現実感に欠ける。信濃毎日新聞社の協力を得て、本校が契約していた、月額払いによる「データベースへのアクセス」は、この課題を解消してくれる一つの道筋であると思われる。